

子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか

—学生の保育記録の分析結果—

白石敏行・友定啓子・入江礼子*・小原敏郎*

How Do Kindergarten Teachers Cope with Children's Conflicts ?
: Analysis of Student Teacher's Reports

Toshiyuki SHIRAIISHI, Keiko TOMOSADA, Reiko IRIE and Toshio OHARA

(Received September 28, 2007)

1. 研究目的

子ども同士のトラブルは、お互いの思い・願いを表現し、そこに行き違いがあることによって生じる。トラブル場面は子どもが成長し、社会的世界を広げていく場でもあり、子どもの人と関わる力の発達においてきわめて重要な役割を果たしている。

他方、保育者の役割は、単にトラブルを解決するだけでなく、トラブル体験をとおして、子どもに育つことはなにかを見極め、それを発達の体験として積み重ねられるようにすることである。したがって、トラブル場面における保育者には、意思的で能動的なかわりが求められることになる。

実際の保育場面での保育者のかわりは、子どもの発達、個人差、場の状況、行動理解、保育者の子ども観・トラブル観・保育観に大きく影響される。また、場面依存性が強く理論化が困難であり、現状では個々の保育者の経験的に蓄積された援助法に依拠している状態である。

そのため、経験的な蓄積が少ない保育者養成課程の学生にとって、授業での保育参加や教育実習において、子どもとのかわりが難しい状況は、子ども同士のトラブル場面である。特に、うまくかわれなかったときには、自信をなくしてしまうことさえある。このような子ども同士のトラブル場面におけるかわりについては、保育参加後のレポートや教育実習の事後指導でも話し合いの話題の中心となっている。トラブル場面は、上述したような子どもが育つ場面でもあり同時に保育者を志す学生が保育者として成長する場面でもある。

これまで子どものトラブル・いざこざに関する研究は多く見られる（たとえば、木下・斉藤・朝生，1986；Kinoshita, Saito & Matsunaga, 1993；倉持，1992；倉持，2001；斉藤・木下・朝生，1986；高坂，1996）が、それに対する保育者のかわりの内容に着目した研究は非常に少ない。

そこで、本研究では、子ども同士のトラブル場面において保育者がどうかかわっているかについて、保育者自身による保育記録を収集し、その記述内容に着目して分析を行い、保育者のかわりの実態を明らかにしつつ、その行為の底流にある理論的枠組みを抽出することを目的とする。その際、保育者予備軍である学生の記録と比較することで、保育者養成における「人

*共立女子大学

間関係」の指導の視点を得ることも目的とする。

なお、本論文では、収集した保育記録のうち、保育者の保育記録がまだ十分に精査できていないため、記録の精査を終えた学生の結果について報告する。

2. 方法

- (1) 記録収集方法：保育者（幼稚園教諭）・学生（保育者養成課程3・4年）に、「子ども同士のトラブル（二人以上の子どもがいて、誰かが困った状況になっている）場面」に関して、子どもの姿と、自身がどうかかわったかをできるだけ具体的なことばや行為として記述してもらった。保育者には通常の保育場面におけるトラブル場面、学生には教育実習または授業での保育参加におけるトラブル場面について記述してもらった。
- (2) 保育記録協力者：保育者10名（経験年数5年未満 2名、5年～10年未満 5名、11年以上 3名）、学生27名
- (3) 記録収集時期：2006年9月～2007年1月
- (4) 収集された事例数：保育者から120事例（現在精査中）、学生から69事例が得られた。学生から収集された事例（1名あたり1事例～11事例）の内訳は以下のとおりである。3歳児は8事例（解決：4事例、未解決：3事例、どちらでもない：1事例）、4歳児は23事例（解決：13事例、未解決：10事例）、5歳児は38事例（解決：20事例、未解決：18事例）であった。分析は、事例数が少ない3歳児を除く、4歳児・5歳児の61事例について行った。

3. 分析の枠組み

収集した全事例の内容を検討し、KJ法的な手法を用いて分析の枠組みを作成した。内容の分類は、共同研究者全員で協議をし、内容の調整、一致を図った。

(1) トラブル場面の認定（現象）

トラブル場面をどのように認定しているのか分析したところ、表1に示す現象をトラブル場面として認定していることが明らかとなった。

表1 トラブル場面の認定（現象）

現象名	概要
身体的攻撃	たたく、ける、引っ張るなど
泣き	誰かが泣いている
言い合い	ことばでの応酬が起こっている
保育者に訴え	当事者や周囲の子どもが困って保育者に訴える
否定的感情	行為にはならないが、否定的感情をもっていることがわかる

(2) トラブルの原因

トラブルの原因について分析したところ、表2のように分類された。

表2 トラブルの原因

原因名	概要
遊びや仲間への加入	遊びへの参加や仲間入りの不一致
モノ・場所の取り合い	モノの使用や場所の占有に関する不一致
ルール生活・遊び	生活や遊びのルールのずれ
イメージのずれ	遊びや生活の内容に関してのイメージのずれ
不快な言葉	けなす、悪口を言うなど
不快な行為	たたく、ぶつかるなどの行為が原因となるもの
勘違い	相手の行為の意図の誤解によるもの
不明	

(3) トラブルに対する保育者のかかわり

保育者・学生のかかわりの内容を分析したところ、表3に示すように分類された。

なお、例示は収集した保育記録に記述された事例の一部である。

表3 トラブルに対する保育者のかかわり

大項目	小項目	概要	例
落ち着かせる	身体的制止・移動	とめる、引き離す、移動する	Mの体を止めながら～
	気持ちを受けとめる	その子の気持ちをことばで確かめたり、気持ちが静まるのを待つ	泣いているMaをなだめながら「痛かったんだね」とRの気持ちをもう一度受け止めてから
保育者が状況をとらえる	状況の確認	保育者が状況を理解する	どうやら病院ごっここの時に使うグッズを別の人が使っているらしい
	子どもに理由を聞く	当事者や周囲の人に理由を聞く	どうしてけんかになっちゃったの？ どうしてたたいたの？
	要求・気持ちの確認	本人に確認する	一緒に遊びたかったんだね
気持ちや要求の代弁	状況の説明	トラブルの状況を子どもにわかるように説明する	赤いのは、Miちゃんが先に乗っちゃったのよ。
	気持ちの代弁（一方）	一方（特に問題を抱えた方）の気持ちを相手に伝える	さわってきたりしたらお弁当食べられなくなっちゃうから嫌だったんだよね
	気持ちの代弁（双方）	双方の気持ちを双方に伝える	M君もS君もかっこいい棒がほしくてつい取ってしまったんよ。
	要求の代弁	自分または相手の主張を確認し、知らせる	Kちゃんも仲間に入りたいんじゃないの？
解決の相談	話し合いの提案		Iちゃん、もう1回ちゃんと話してみてよ。
	交渉方法の提案	交渉のしかたを教える	たたかなくても口で言ったらわかるよ。
	子どもに相談		そういうときはどうしたらいいんだろう？

解決策の提案	解決策の提案	保育者が解決策を考えて、それを子どもが受け入れるように促す	みんなのものだから順番に使おう 今日は先生と遊んで、明日は4人で楽しく遊ぼうか
	謝罪の提案	謝るように言う、保育者と一緒に謝る、保育者が代わりに謝る	ごめんねって言うといいかもね、一緒に謝りに行こう、先生が謝ってあげようか
	仲直りの提案		また仲良しになったらスッキリするんじゃない
保育者が解決する	説得（一方）	相手の主張を取り入れるように求める	Kちゃんもどうしても片付けたいんだって。だから、これはKちゃんに渡そう。
	説得（双方）	双方の主張を取り入れるように求める	（Aに）サッカーは中央から始めるんよ。（Bに）キーパーから始めてもいいんじゃない。
指導	説諭	やっていることはよくないことだと言う、諭す	パンチしたらいけんよ。そんなこと言ってはいけないよ。
	認める・励ます		Cちゃんはやさしいね。
子どもが解決	子どもが解決	当事者や周囲の子が解決策を提案し、受け入れる	F「いっぱいだけど、しょうがないか。」4人で再び座る。
その他			気分を変える、違うことに誘うなど

4. 結果と考察

69事例のうち3歳児8事例を除く、4歳児23事例、5歳児38事例の計61事例を対象に、年齢別・終結別の分析を行った。

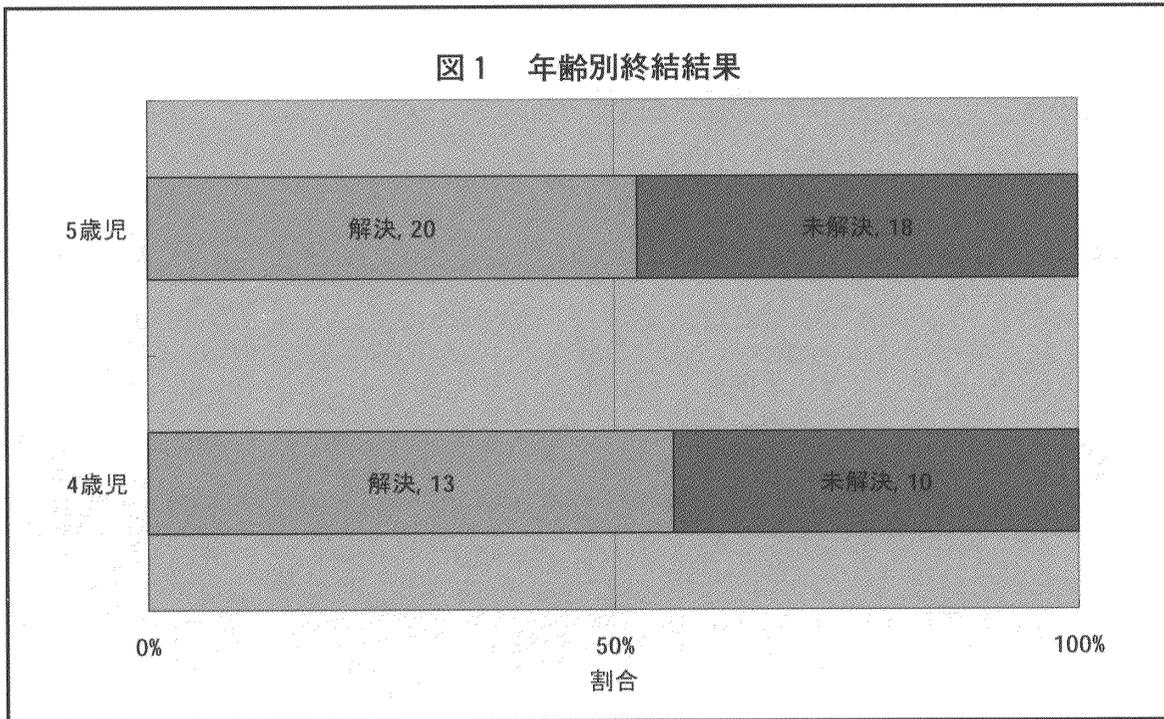
（1）年齢別の終結

年齢別の終結の結果を図1に示した。4歳児23事例のうち、トラブルが解決できた事例が13事例(56.52%)、解決できなかった事例が10事例(43.48%)であった。

5歳児38事例のうち、トラブルが解決できた事例が20事例(52.63%)、解決できなかった事例が18事例(47.37%)であった。

このように、4歳児・5歳児ともに、トラブルが解決した事例と未解決の事例が半数であった。

図1 年齢別終結結果



(2) トラブルの認定と終結との関係

どのような場面をトラブルとして認定したのかを年齢別・終結別にまとめたものが表4である(認定要因は複数ある場合がある)。

4歳児全体では、「泣き」(47.83%)、「言い合い」、「否定的感情」(それぞれ30.43%)の順であった。次に、終結別では、解決の場合が「否定的感情」(38.46%)、「身体的攻撃」、「泣き」(それぞれ30.77%)であり、未解決の場合が「泣き」(70.00%)、「言い合い」(50.00%)であった。

5歳児全体では、「身体的攻撃」(39.47%)、「泣き」(34.21%)、「言い合い」(31.58%)の順であった。次に、終結別では、解決の場合が「泣き」「言い合い」「保育者に訴え」(それぞれ30.00%)であり、未解決の場合が「身体的攻撃」(66.67%)、「泣き」(38.89%)、「言い合い」(33.33%)の順であった。

また、4歳児では「泣き」(解決：30.77%、未解決：70.00%)、「言い合い」(解決：15.38%、未解決：50.00%)が解決の場合に比べて未解決の場合の割合が高かった。

5歳児では「身体的攻撃」(解決：15.00%、未解決：66.67%)が解決の場合に比べて未解決の場合の割合が高かった。

さらに、「保育者に訴え」は4歳児全体・5歳児全体ともに割合が低かった。

このように、4歳児では「泣き」「言い合い」がトラブルとして認定される場面では、トラブルの解決が難しかった。泣いたり、言い合いになっていると子どもの気持ちも高揚しているため、解決が難しかったと考えられる。したがって、まずは高揚している気持ちを収めるようなかわりが求められる。

5歳児では、「身体的攻撃」がトラブルとして認定される場面では、トラブル解決が難しかった。一般的に、5歳児でもいきなり相手に対して身体的攻撃をすることはほとんどなく、相手とのやりとりのなかで身体的攻撃まで進展してしまった場合には、学生にとって事態を収拾することは難しいと考えられる。したがって、そのような事態に至るまでに適切なかわりが必

要となる。

また、4歳児・5歳児ともに、「否定的感情」がトラブルとして認定されていた。これは、他児から何かをされて嫌な気持ちになっていることをトラブルととらえて、その気持ちに寄り添いたいと考えている学生の姿を読み取ることができる。

表4 年齢別・終結別のトラブルの認定

複数選択

	4歳児			5歳児		
	全体 (23事例)	解決 (13事例)	未解決 (10事例)	全体 (38事例)	解決 (20事例)	未解決 (18事例)
身体的攻撃	26.09 (6)	30.77 (4)	20.00 (2)	39.47 (15)	15.00 (3)	66.67 (12)
泣き	47.83 (11)	30.77 (4)	70.00 (7)	34.21 (13)	30.00 (6)	38.89 (7)
言い合い	30.43 (7)	15.38 (2)	50.00 (5)	31.58 (12)	30.00 (6)	33.33 (6)
保育者に訴え	13.04 (3)	7.69 (1)	20.00 (2)	21.05 (8)	30.00 (6)	11.11 (2)
否定的感情	30.43 (7)	38.46 (5)	20.00 (2)	21.05 (8)	20.00 (5)	16.67 (3)

注：上段は割合、下段の（ ）内は事例数を示す。

(3) トラブルの原因と終結との関係

トラブルの原因と終結との関係をまとめたものが表5である（原因は複数ある場合がある）。

4歳児全体では、トラブルの原因は特定の原因に偏らず、いずれの原因も同程度みられた。次に、終結別では、解決の場合が「イメージのずれ」、「不快な行為」（いずれも23.08%）、未解決の場合が「ルール生活・遊び」（40.00%）、「遊びや仲間への加入」、「モノ・場所の取り合い」（いずれも30.00%）であった。

5歳児全体では、「遊びや仲間への加入」（39.47%）、「ルール生活・遊び」（28.95%）であった。次に、終結別では、解決の場合が「遊びや仲間への加入」（50.00%）、「ルール生活・遊び」（25.00%）、未解決の場合が「ルール生活・遊び」（33.33%）、「遊びや仲間への加入」（27.78%）であった。

また、4歳児では、「モノ・場所の取り合い」（解決：7.69%、未解決：30.00%）、「ルール生活・遊び」（解決：7.69%、未解決：40.00%）が原因のとき、解決に比べて未解決の割合が高かった。5歳児では、「遊びや仲間への加入」（解決：50.00%、未解決27.78%）が原因のとき、未解決に比べて解決の割合が高かった。

5歳児で、「遊びや仲間への加入」がトラブルの原因となっている場合に解決される割合が高いのは、これまでの経験から遊びや仲間への加入の方略を多くもっているため、トラブルになってもいろいろな方略を使って解決を図ることができるからではないだろうか。その点、4歳児はまだ方略が少ないので、解決には至ってはいないのではないだろうか。また、「モノ・場所の取り合い」「ルール生活・遊び」がトラブルの原因で4歳児において未解決が多いのは、まだ自己中心的な言動が残っていることに起因しているのではないだろうか。

表5 年齢別・終結別のトラブルの原因

複数選択

	4歳児			5歳児		
	全体 (23事例)	解決 (13事例)	未解決 (10事例)	全体 (38事例)	解決 (20事例)	未解決 (18事例)
遊びや仲間への加入	21.74 (5)	15.38 (2)	30.00 (3)	39.47 (15)	50.00 (10)	27.78 (5)
モノ・場所の取り合い	17.39 (4)	7.69 (1)	30.00 (3)	15.79 (6)	15.00 (3)	16.67 (3)
ルール生活・遊び	21.74 (5)	7.69 (1)	40.00 (4)	28.95 (11)	25.00 (5)	33.33 (6)
イメージのずれ	17.39 (4)	23.08 (3)	10.00 (1)	15.79 (6)	10.00 (2)	22.22 (4)
不快な言葉	8.70 (2)	7.69 (1)	10.00 (1)	7.89 (3)	10.00 (2)	5.56 (1)
不快な行為	17.39 (4)	23.08 (3)	10.00 (1)	13.16 (5)	5.00 (1)	22.22 (4)
勘違い	0.00 (0)	0.00 (0)	0.00 (0)	5.26 (2)	10.00 (2)	0.00 (0)

注：上段は割合、下段の（ ）内は事例数を示す。

(4) トラブルに対するかかわりと終結との関係

●トラブルに対するかかわり（小項目）と終結との関係

トラブルに対するかかわり（小項目）と終結との関係についてまとめたものが表6である（かかわりは複数ある場合がある）。

4歳児全体では、「状況の確認」(47.83%)、「気持ちの受けとめ」、「子どもに理由を聞く」(それぞれ43.48%)の順であった。次に、終結別では、解決の場合が「気持ちの受けとめ」、「子どもに理由を聞く」(それぞれ53.85%)、「状況の確認」(46.15%)、未解決の場合が「状況の確認」(50.00%)、「子どもに理由を聞く」、「解決策の提案」(いずれも30.00%)であった。

5歳児全体では、「子どもに理由を聞く」(36.84%)、「気持ちの受けとめ」(31.58%)、「身体的制止・移動」(28.95%)の順であった。次に、終結別では、解決の場合が「気持ちの受けとめ」、「子どもに理由を聞く」(いずれも40.00%)、「状況の確認」、「状況の説明」、「気持ちの代弁(一方)」(いずれも25.00%)、未解決の場合が「身体的制止・移動」(50.00%)、「子どもに理由を聞く」(33.33%)であった。

また、4歳児では「気持ちの受けとめ」(解決：53.85%、未解決：30.00%)、「子どもに理由を聞く」(解決：53.85%、未解決：30.00%)というかかわりをした場合に、未解決に比べて解決する割合が高かった。5歳児では、「気持ちの受けとめ」(解決：40.00%、未解決：22.22%)、「状況の説明」(解決：25.00%、未解決：5.56%)、「気持ちの代弁(一方)」(解決：25.00%、未解決：11.11%)というかかわりをした場合に、未解決に比べて解決する割合が高かった。他方、「身体的制止・移動」(解決：10.00%、未解決：50.00%)、「解決策の提案」「説得(一方)」(いずれも解決：10.00%、未解決：22.22%)というかかわりをした場合に、解決に

比べて未解決の割合が高かった。

トラブル場面におけるかかわりとして、「気持ちを受けとめる」「状況の確認」「子どもに理由を聞く」が終結の結果にかかわらず用いられているが、特に解決場面では多く用いられている。このことは、これらのかかわりがトラブルの解決には重要なかかわりであることを示している。また、5歳児の未解決において、「身体的制止・移動」が多く用いられているが、上述したようにそこまで進展してしまったトラブルは収拾が難しいということである。さらに、「状況の説明」「気持ちの代弁（一方）」によって解決できているのは、状況を説明したり、気持ちを代弁することによって、相手が状況や気持ちを理解することができているからではないだろうか。

表6 年齢別・終結別のトラブルに対するかかわり（小項目）

複数選択

	4歳児			5歳児		
	全体 (23事例)	解決 (13事例)	未解決 (10事例)	全体 (38事例)	解決 (20事例)	未解決 (18事例)
身体的制止・移動	13.04 (3)	7.69 (1)	20.00 (2)	28.95 (11)	10.00 (2)	50.00 (9)
気持ちの受けとめ	43.48 (10)	53.85 (7)	30.00 (3)	31.58 (12)	40.00 (8)	22.22 (4)
状況の確認	47.83 (11)	46.15 (6)	50.00 (5)	21.05 (8)	25.00 (5)	16.67 (3)
子どもに理由を聞く	43.48 (10)	53.85 (7)	30.00 (3)	36.84 (14)	40.00 (8)	33.33 (6)
要求・気持ちの確認	17.39 (4)	30.77 (4)	0.00 (0)	15.79 (6)	20.00 (4)	11.11 (2)
状況の説明	13.04 (3)	15.38 (2)	10.00 (1)	15.79 (6)	25.00 (5)	5.56 (1)
気持ちの代弁（一方）	17.39 (4)	15.38 (2)	20.00 (2)	18.42 (7)	25.00 (5)	11.11 (2)
気持ちの代弁（双方）	17.39 (4)	23.08 (3)	10.00 (1)	2.63 (1)	5.00 (1)	0.00 (0)
要求の代弁	4.35 (1)	0.00 (0)	10.00 (1)	5.26 (2)	5.00 (1)	5.56 (1)
話し合いの提案	8.70 (2)	15.38 (2)	0.00 (0)	15.79 (6)	20.00 (4)	11.11 (2)
交渉方法の提案	8.70 (2)	15.38 (2)	0 (0)	10.53 (4)	15.00 (3)	5.56 (1)
子どもに相談	8.70 (2)	15.38 (2)	0.00 (0)	2.67 (1)	0.00 (0)	5.56 (1)
解決策の提案	13.04 (3)	0.00 (0)	30.00 (3)	15.79 (6)	10.00 (2)	22.22 (4)
謝罪の提案	4.35 (1)	0.00 (0)	10.00 (1)	2.63 (1)	5.00 (1)	0.00 (0)
仲直りの提案	13.04 (3)	15.38 (2)	10.00 (1)	13.16 (5)	15.00 (3)	11.11 (2)

説得 (一方)	8.70 (2)	0.00 (0)	20.00 (2)	15.79 (6)	10.00 (2)	22.22 (4)
説得 (双方)	0.00 (0)	0.00 (0)	0.00 (0)	5.26 (2)	5.00 (1)	5.56 (1)
説諭	26.09 (6)	30.77 (4)	20.00 (2)	18.42 (7)	20.00 (4)	17.67 (3)
認める・励ます	4.35 (1)	7.69 (1)	0.00 (0)	0.00 (0)	0.00 (0)	0.00 (0)
子どもが解決	13.04 (3)	23.08 (3)	0.00 (0)	10.53 (4)	20.00 (4)	0.00 (0)
その他	8.70 (2)	7.69 (1)	10.00 (1)	5.26 (2)	5.00 (1)	5.56 (1)

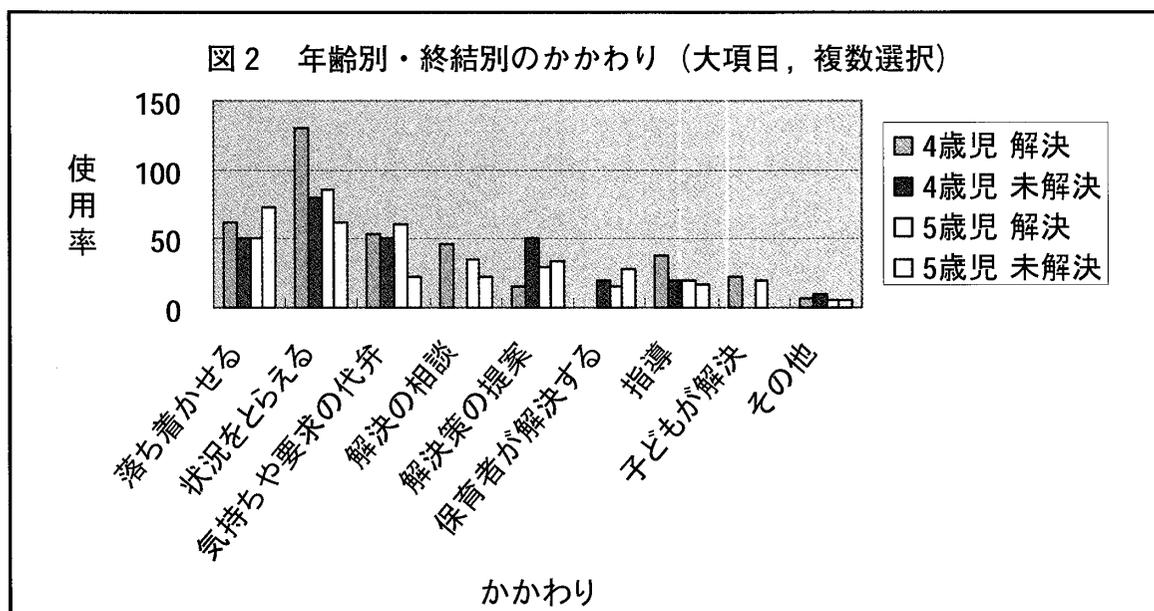
注：上段は割合、下段の () 内は事例数を示す。

●トラブルに対するかかわり（大項目）と終結との関係

次に、表3に示したトラブルに対する保育者のかかわりを大項目ごとにまとめ図示したものが図2である。その結果、4歳児・5歳児ともに、「保育者が状況をとらえる」「落ち着かせる」「気持ちや要求の代弁」が半数以上の事例で用いられている。特に、「保育者が状況をとらえる」というかかわりは、ほとんどの事例で一度は用いられており、4歳児の解決の場面において1回以上用いられていることがわかる。

また、4歳児の未解決の場合、「解決の相談」というかかわりはまったく用いられておらず、そのかわり「解決策の提案」というかかわりが多く用いられている。このように、保育者が解決策を提案しても受け入れられないのは、提案のしかたや解決策の内容が十分でないので受け入れが難しく、解決には至っていないのではないだろうか。

「落ち着かせる」というかかわりは半数以上で用いられているが、その次にどのようなかかわりをするのかによって、終結の結果にちがいがみられているのではないだろうか。また、「保育者が状況をとらえる」というかかわりは、トラブルが発生したときに必ずしも保育者がその場にいるわけではないので、状況を把握するための有効なかかわりとして用いられている。



(5) トラブルに対するかかわりと終結との相関関係

●トラブルに対するかかわり（小項目）と終結の相関関係

トラブルに対するかかわり（小項目）との相関関係を表7に示した。

4歳児では、「要求・気持ちの確認」($r=0.40$)に中程度の正の相関、「解決策の提案」($r=-0.44$)、「説得（一方）」($r=-0.35$)に中程度の負の相関が認められた。

5歳児では、「身体的制止・移動」($r=-0.44$)に負の相関が認められた。

すなわち、4歳児では、「要求・気持ちの確認」というかかわりを用いたほどトラブルが解決され、「解決策の提案」「説得（一方）」というかかわりを用いたほどトラブルは解決されていない。他方、5歳児では、「身体的制止・移動」というかかわりを用いたほどトラブルは解決されていない。

このように、4歳児においては、「要求・気持ちの確認」というかかわりがトラブルの解決に有効なかかわりであることがいえる。逆に、「解決策の提案」「説得（一方）」というかかわりはトラブルの解決に有効には機能していない。

5歳児においては、「身体的制止・移動」がというかかわりがトラブルの解決には有効に機能していない。

表7 トラブルに対するかかわり（小項目）と終結との相関関係

かかわり（小項目）	4歳児	5歳児
身体的制止・移動	-0.18	-0.44
気持ちの受けとめ	0.24	0.19
状況の確認	-0.04	0.10
子どもに理由を聞く	0.24	0.02
要求・気持ちの確認	0.40	0.12
状況の説明	0.08	0.27
気持ちの代弁（一方）	-0.06	0.18
気持ちの代弁（双方）	0.17	0.16
要求の代弁	-0.24	-0.01
話し合いの提案	0.27	0.12
交渉方法の提案	0.27	0.15
子どもに相談	0.27	-0.17
解決策の提案	-0.44	-0.17
謝罪の提案	-0.24	0.16
仲直りの提案	0.08	0.06
説得（一方）	-0.35	-0.17
説得（双方）	0	-0.01
説諭	0.12	0.04
はめる・認める	0.19	0
子どもが解決	0.34	0.33
その他	-0.04	-0.01

●トラブルに対するかかわり（大項目）と終結の相関関係

次に、トラブルに対するかかわり（大項目）と終結との相関関係を表8に示した。

4歳児では、「解決の相談」($r=0.40$)に中程度の正の相関、「解決策の提案」($r=-0.37$)、「保育者が解決」($r=-0.35$)に中程度の負の相関が認められた。すなわち、保育者が子どもに「解決の相談」というかかわりを用いるほどトラブルは解決され、「解決策の提案」「保育者が解決する」というかかわりを用いるほどトラブルは解決されていない。

5歳児では、「気持ちや要求の代弁」($r=0.33$)に中程度の正の相関が認められた。すなわち、「気持ちや要求の代弁」というかかわりを用いるほどトラブルが解決されている。

表7の小項目の結果と若干異なる結果が生じているのは、大項目を構成する小項目同士の相殺によるものであると考えられる。したがって、大項目を構成する小項目の再検討が必要であると考えられる。

表8 トラブルに対するかかわり（大項目）と終結との相関関係

かかわり（小項目）	4歳児	5歳児
落ち着かせる	0.12	-0.16
保育者が状況をとらえる	0.28	0.11
気持ちや要求の代弁	0.06	0.33
解決の相談	0.40	0.21
解決策の提案	-0.37	-0.09
保育者が解決する	-0.35	-0.16
指導	0.20	0.04
子どもが解決	0.34	0.33
その他	-0.04	-0.01

(6) トラブルに対するかかわりのレパートリー

●トラブルに対するかかわりの平均レパートリー

年齢別・終結別のトラブルに対するかかわりのレパートリーを示したのが表9である。

4歳児全体では、3.35(SD=1.77)、解決が3.77(SD=2.01)、未解決が2.80(SD=1.32)であった。5歳児全体では、2.92(SD=1.70)、解決が3.20(SD=1.85)、未解決が2.61(SD=1.50)であった。

このように、4歳児が5歳児に比べて多くのかかわりを必要としているのは、発達のなちがいが大きな要因であると考えられる。また、4歳児・5歳児とも、解決の場合が未解決の場合に比べて多くのかかわりをしているのは、何とかしてトラブルを解決したいという学生の思いの表れであると考えられる。逆に、未解決の場合に解決の場合と比べてかかわりが少ないのは、学生があきらめてしまうこともあるが、保育記録にも記述されているように、子どもの側がその場を離れたりすることによって自然消滅してしまうこともあるからではないだろうか。

表9 年齢別・終結別のかかわりの平均レパトリー数

	4歳児			5歳児		
	全体 (23事例)	解決 (13事例)	未解決 (10事例)	全体 (38事例)	解決 (20事例)	未解決 (18事例)
平均	3.35	3.77	2.80	2.92	3.20	2.61
SD	1.77	2.01	1.32	1.70	1.85	1.50

●トラブルに対するかかわりのレパトリー別の事例数

次に、年齢別・終結別のかかわりのレパトリー別の事例数をまとめたものが表10である。

4歳児全体では、2種類が6事例、3・5種類がそれぞれ5事例の順であった。終結別では、解決のケースはいずれのレパトリーも2～3事例であるのに対して、未解決の場合は2種類が4事例ともっとも多かった。

5歳児全体では、2種類が10事例、1種類が9事例、3・4種類がそれぞれ6事例の順であった。終結別では、解決のケースは2種類が5事例、1種類が4事例であり、未解決の場合は1・2種類が5事例であった。

このように、5歳児では、終結の結果にかかわらず、1種類・2種類に集中しているのは、これまでのトラブル経験や相手との関係のなかで、どのようにこの事態を克服すればよいかということを経験しているからではないだろうか。また、4歳児・5歳児ともに、解決できている場合には、多くのかかわりを用いて何とかトラブルを解決しようとする学生の姿勢がうかがえる。

表10 年齢別・終結別のかかわりのレパトリー数

	4歳児			5歳児		
	全体 (23事例)	解決 (13事例)	未解決 (10事例)	全体 (38事例)	解決 (20事例)	未解決 (18事例)
7種類	2	2	0	1	1	0
6種類	0	0	0	3	2	1
5種類	5	3	2	3	2	1
4種類	2	2	0	6	3	3
3種類	5	2	3	6	3	3
2種類	6	2	4	10	5	5
1種類	3	2	1	9	4	5

5. 今後の課題

本論文では、大まかな傾向を把握するために、精査ができた学生の保育記録の量的分析を行った結果を報告したが、今後は丁寧に質的な分析をする必要がある。また、現在、精査を行っている保育者の保育記録についても質的な分析を進めていく必要がある。それによって、保育者と学生との比較が可能となり、かかわりの質的なちがいを明らかにすることができると思われる。また、質的な分析過程において、分析の枠組みについて再検証することも必要となると思

われる。さらに、保育者のかかわりについては、かかわりがもつ保育的意味を明らかにする必要もある。

そうするところによって、保育者のかかわりの実態を明らかにすることができるとともに、その行為の底流にある理論的枠組みを抽出することもできると考える。併せて、保育者養成における「人間関係」の指導の視点を得ることも可能であると思われる。

引用文献

- 木下芳子・斉藤こずゑ・朝生あけみ 1986 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—3歳児におけるいざこざの発生と解決— 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学)(I), 第35巻, 1-15.
- Kinoshita, Y., Saito, K., & Matsunaga, A. 1993 Developmental changes in antecedents and outcomes of peer conflict among preschool children: A longitudinal study. *Japanese Psychological Research*, 35, 57-69.
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係— 発達心理学研究, 3, 1-8.
- 倉持清美 2001 第8章 仲間と出会う場としての園 無藤隆(編) 保育・看護・福祉プリマーズ⑤ 発達心理学 ミネルヴァ書房 109-126.
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 第3章 仲間関係 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ(編) 子ども時代を豊かに—新しい保育心理学— 学文社 59-111.
- 高坂 聡 1996 幼稚園児のいざこざに関する自然観察的研究: おもちゃを取るための方略の分類 発達心理学研究, 7, 62-72.

付記

本研究の一部は、日本乳幼児教育学会第17回大会(2007年8月、東京学芸大学)において発表された。

謝辞

本研究を進めるにあたって、日々の保育や勉学に忙しい中、保育記録を取り、提供して下さった幼稚園の先生方及び学生の皆様に厚く感謝申し上げます。